

動きながら 考える日記

「シェアハウスの話」



地域おこし協力隊
小谷 英介

若者が地方に活躍の場を求めて移住する動きが少しずつ活発化しているなか、大山町でも地域任意団体「築き会」などの尽力もあり、移住希望の問い合わせが増えていきます。

本町では、この流れをさらに加速するため、大山町に興味のある若者が、よりスムーズに地域にとけ込めるように「田舎暮らし入門」というテーマでシェアハウスを作ろうとしています。私自身も過去10年間で、3つのシェアハウスに住んだ経験があり、地域おこし協力隊として今回の企画・運営に深く関わることになりました。今回はシェアハウスについて書きたいと思います。

シェアハウスって？

シェアハウスとは「複数の人がひとつ屋根の下で共同生活をする住居」を指します。寮のようなものですが、会社や学生寮とは違い、社会的につながりのない人同士が集まって共同生活をします。一昔前までは「ガイジンハウス」と呼ばれていました。一般アパートほど入居審査が厳しくなく、外国人が入居しやすいかったためです。節約志向の若者にも人気でした。

2006年当時、私が東京で住んでいたシェアハウスはまさにこのタイプでした。安かろう・悪かろうのひとつの部屋に4つのベッドを並べて知らない人との共同生活。住人は私を含めた日本人の他に、インド人・中国人・韓国人・フラン

ス人がいて、職種も、ダンサー・風俗ライターなどさまざまでした。そのころは、シェアハウスに住んでいることを周囲に話すと、変人扱いされるか、「お前はそこまでお金に困っているのか」と心配されたものでした。

「汚い」から「おしゃれ」へ

そんな状況が、2008年のリーマンショックをきっかけに大きく変わり始めました。大手企業が不況によって一斉に社員寮を手放し、空き物件の有効活用策としてシェアハウスが注目を浴びたのです。業者が、大型の社員寮だった物件をお洒落なシェアハウスに改装して入居者を募りました。私が3つ目に住んだシェアハウスはこのタイプです。大手企業で働く若い男女60人が住み、各人に個室があり、レストランのような広いキッチンとリビング、大きなスクリーンで映画を観ることができるシアタールーム、図書スペースなど、一人暮らしでは考えられない贅沢でおしゃれな空間を共有していました。ドラマやバラエティ番組でも題材にされ、世間の認知も進みました。

「テーマ型シェアハウス」の登場

最近では、共通の目的を持った人同士に對して業者が最適な環境を整える「テーマ型シェアハウス」に注目が集まっています。

住人同士が英語で話す「英会話シェアハウス」、シングルマザー同士が子ども

の世話を助け合う「シングルマザーシェアハウス」、起業を志す人が切磋琢磨する「起業家シェアハウス」も登場しました。このタイプのシェアハウスは、テーマを重視するので、設備が充実していない一軒家でも人を惹き付けています。

田舎暮らし入門・体験ができる場所を

今回、本町では、移住希望者の悩みを軽減するために、地域の人との繋ぎや最低限食べていくための仕事を紹介する、など地域暮らしのアドバイザーが存在するシェアハウスをつくりたいと考えています。既に本町に移住された方々にお話を聞くと、「移住当初は知り合いも情報もなく苦労した」と話される方がほとんどだったからです。

皆さんの理解と協力が不可欠です

たとえどんなによい仕組みやおしゃれな空間ができあがったとしても、地元の人への応援がなければ、よそから来た人の定住にはつながらないでしょう。田舎暮らしを模索する若者が集う場所に、地域のおじさんやおばさんが訪れて話をしていく、ときには料理やお酒を囲んでワイワイ盛り上がる。そんな住居を作りたいと思います。ご理解とご協力をお願いします。

〈地域おこし協力隊関連イベント〉

・今月もiPad講習会などを開きます。詳細は17ページをご覧ください！